

## 宇治の夕暮れ

赤木和夫  
物質工学系教授

それほど遠い昔のことではないにもかかわらず、セピア色に彩られた思い出というものがある。それは、その思い出を通して、過ぎし日の原風景が蘇るからであるかもしれない。

今から7年前の5月末、高分子学会の年次大会が京都国際会館で開催された。会期中の半日を使って、共同研究の打ち合わせのため、宇治の京大化学研究所に白川先生と二人で出向いた。打ち合わせもおわり、JR黄檗（おうばく）駅で京都駅行きの電車を待っていた。午後の日差しも緩み、涼風が青天上の駅構内を吹き抜けていた。駅には不思議なほど人影もなかった。周りの景色をぐるーと見渡してやがて遠く山間の寺を見やりながら、不意に白川先生がぼつんといわれた。「あまり話したことはないと思うけど、小さい頃、このあたりに住んでいたことがあるんです。』『ええ？ そうなんで

すか？』『うん、家族で満州から引き上げてきた頃、高山に移り住む前に、一時、このあたりにね。』一瞬、まわりが白色光に照らし出されたような感覚にとらわれた。その会話はそこで途切れたが、それ以上委細を聞く必要性も感じられなかった。白川先生の原風景を垣間みたような思いがした。

1984年、筑波大学物質工学系の白川先生の研究パートナーとして講師に採用された。院生時代から共同研究をさせていただいた関係で、それまでに数度学会等でお会いしたことはあるが、小生は量子化学計算を主として行っていたために、本格的な合成やましてやアセチレンの重合などはズブの素人であった。もちろん公募に応募する限りは何でも行うつもりでいたが、重合経験のない小生が実際に採用されるとは思ってもみなかった。では何故採用されたのか、それは「世界七

不思議のひとつ」である。人生には聞かぬが花ということもある。内実を知る恐ろしさも手伝って、いまだ真面目に伺ったことはない。

着任して早々、当時の学系長室に挨拶に行くと、開口一番「アセチレンの重合はできますか？」と尋ねられた。呼吸おいてゆっくりと「はい、努力します」と応えると、続けざまに「今回の一般公募は物質工学系としては初めてのケースです。結果如何によって後々に影響がありますので、研究パートナーしてうまくやっていただくよう頑張ってもらわねば困ります」と大きな釘を刺された。『ということは、失敗すると次回からはもう一般公募は行わないということか。』後進の人に対しても、大変な責務を背負わされた思いがした。そうした学系内の状況を白川先生も百も承知されておられたであろう。一からひとつひとつ懇切丁寧に実験の手ほどきをしてくださった。実験ノートのつけ方、重合用フラスコの扱い方、水蒸気洗浄の仕方、シンリンジの持ち方、真空ラインの操作、等等、数え上げたらきりが無い程の事柄を教示していただいた。

ある時、研究室のゼミで「合成の研究室はある意味で徒弟制である」といわれ

た。婉曲な言い方ながら、曖昧さを排除したその言葉には少なからず抵抗感を覚えた。院生時代、非経験的(non-empirical)分子軌道という計算手法がはやり始めていた。今でいう、ab initio法、あるいは第一原理計算法と呼ばれるものである。この非経験的という言葉は、単なる計算手法の形容詞にとどまらず、化学の古色騒然たる経験主義を排除して、なにもものにもとられず、最初から新たに化学を創っていこうとする、量子化学計算の分野では御旗に近い言葉になっていた。半経験的あるいは非経験的分子軌道法を駆使するだけで、新しい化学の到来に寄与できるのではとの考えが、将来の展望も見えない院生時代の心の拠り所であり、未熟ながら高く掲げた理想であった。経験主義と表裏一体の関係にある徒弟制という言葉に、居場所が変わったとはいえ、ある種の受け入れ難い思いがあったとしても仕方がなかった。

しかし、その鬱積(うっせき)した思いとは裏腹に、毎日、新しい実験室の立ち上げに明け暮れた。着任した当時の研究室は学生、院生合わせて4~5名と小所帯であったため、彼らと一緒にあって、否、彼らに教わりながら重合実験の練習をした。一日も早く重合技術を身につけようと懸命になって操作手順を実験

ノートに書き綴った覚えがある。まさに、板前修業で料理長の包丁さばきや味付けの技術を盗み取る意気込みで「修業」に臨んでいたように思う。それは、紛れもなく合成実験室における「徒弟制」の意味するところであった。人を通じて経験と技術を引き継ぐことで、研究内容も伝えていくことができる。後に、字句だけで「徒弟制」という言葉を捉えていた自分を恥じた。そこで、事物に潜む本質を捉えることの大事さを学んだ。

80年代から90年代にかけて、酸化物高温超伝導体やフラーレンなど、導電性高分子への注目を凌ぐほどの数多くの新物質が登場してきた。その度毎に、導電性高分子の分野から他分野に移行したり、両分野にまたがって研究を進める人たちも増えていった。そうした中において、白川先生はこれらの新物質に大きな関心を寄せられてはいたが、研究の対象はポリアセチレンなどの導電性高分子に徹して地道に研究を続けてこられた。時代の動向や風潮に振り回されることなく、我が道を邁進されてきたように思う。その姿は、例えるならオランダの風車といえよう。冬の北海から吹き付ける横殴りの烈風や逆風には身じろぎもせ

ず、春には色とりどりのチューリップに囲まれながら順風に呼応してゆっくりと羽を回し、粉をひき揚水に役立たんとする姿勢である。穏やかさの中に秘めた厳とした一途さと孤高といえるまでの気高さが、白川先生の持ち味であり、周囲の人間を魅了し続けた要因ではなかったであろうか。

人間誰しも人や物に対して好き嫌いがあろう。むしろそれが自然の感情であらう。理性で感情を強引に押さえ込むことも可能であるが、それは常に多大のストレスを生み身も心ももたない。大事なことは、そうした感情を持ったとしても、理性でどこまでそれを包み込むことができるかということであろう。包み込むオブラートの厚さが厚い程、周りの人を傷つけることも少なくなる。白川先生の温厚な人柄と人当たりの良さは、育ちの良さがなさせる技だと、あるいは生まれながらに持ち得た長所であると思っていた。しかし、しばらくご一緒させていたでいる内に、いかなる時も、随分と神経を使われながら、きめ細やかに対処されているのに気がついた。それは最大限の理性を投入してオブラートをできるだけ厚くされている懸命な姿であった。傍目からは決してわからぬ程の自然さと

洗練さは、人知れぬ自己研鑽と鍛錬の賜物であるかのように思われた。『ああ、いつどこでこのような身を助ける術までも修得されたのであろうか』。白川先生の人格形成と上質な資質に、尽きることのない興味を覚えたのは着任して数年後であった。

講座制を敷かない筑波大学では、物質工学系のように、教授は助手ないし講師をパートナーとして研究グループを構成する。研究パートナーとの連携の仕方は、どの階層の人間にとっても最も神経を使う事柄である。“うまくやっていく”にはどのような接し方が最もよいのか、いつも考えさせられる命題である。いかなる職場であっても公私混同はあってはならない。当然、必要以上の私的な話は極力控えるべきであろう。上司という立場であれば、事あるときは万人のため「泣いて馬謖（ばしょく）を斬る」だけの厳しさと、それを実行できる距離を保っておく必要がある。部下であれば、それを潔く受け入れるだけの覚悟と緊張感を常に持つておかねばならない。ゆえに、部下の方から私的な結びつきを強めんとする態度は厳に慎むべきであろう。とはいえ、両者にコミュニケーションがなくなると、意思疎通に欠け共同し

て研究を行うにも支障がでてくる。即刻、研究のパートナーにはなりえなくなる。やはり、厳格にかつ賢明にして、“心のスープが冷めない距離”を保つことが限りなく大事なこととなってくる。であればこそ、大学を離れた出張先であろうが、プライベートな話題は意識的に控えてきたつもりもある。事実、そうした話をした覚えはない。白川先生とて同じ思いで自らを律しつつ、あるべき姿勢を堅持されておられたであろう。

茜（あかね）射す宇治の夕暮れに、問わず語らず当時の想い出を語られたのは、どうした訳であったのだろうか。遠い記憶の中では見慣れた風景が眼前に飛び込んできたため、幼少の頃を思い出されたのであろうか、あるいは、日常の煩雑さからいっとき解放され、肩の力も抜けほっとされたからでであろうか。いずれにせよ、大切に仕舞ってこられたであろう心のアルバムを開いてみせていただいたことが無上に嬉しかった。研究上の“師弟”関係をあまりにも重視するあまり、世間一般の大人同士としてフランクに話をしたこともなかったように思われる。9年目にして、“大人の話”をするに足りる人間として認めていただいたからなのであろうか。まさに、初めて魂が

触れ合う瞬間であったように思う。その時を境に、研究室や大学の運営にまつわる話であっても、それまではひとりで胸の内に納めておられたであろうことも、少しずつ話をしていただけるようになった。もともと聞き上手で話上手な方であられたから、会話もスムーズであったが、互いに過度に気を使う必要もなくなるにつれ、会話そのものが“スイング”するが如く、知的にも楽しいものになっていった。

宇治から京都までの数十分間、電車の長椅子に同じ向きに座りながら、流れ行く車窓の景色を見やっていた。いつもとさほどかわらぬトーンで話しながら、頭

のもう半分では、『当時、白川先生はあの宇治の地でどのような体験をされ、どのような楽しい思い出を心のポケットにつめこまれたのか』と思いを巡らしていた。僅か半日足らずの小旅行ではあったが、郷愁と充足感が同居した満ち足りた時間を過ごすことができた。白川先生をより深く知る貴重な体験でもあった。すでに公人となられた今となれば何よりの思い出である。

(\*) 本文は、2001年1月発行の雑誌「化学」(化学同人)への寄稿文であり、同社のご厚意により転載許可をいただいた。

(あかぎかずお 物質化学)

